

「倭の五王」とはだれか

「倭の五王」を「応神〜雄略」に比定する「定説」は教科書にも載っています。

事典で見ると、以下のようにありました。

解説：倭の五王（読み）わのごおう・・・ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説

『宋書』『南齊書』『梁書』など中国の六朝時代の史書に記された倭国の讃（さん）、珍（ちん）、済（せい）、興（こう）、武（ぶ）の5人の王をさす。413年倭王が東晋へ、425年倭王讃が宋へ、438年倭王讃の弟珍（『宋書』は珍、『梁書』は弥とする）が宋へ、443、451年倭王済が宋へ、462年倭王済の子興が宋へ、478年倭王興の弟武が宋へというように、5世紀に東晋、宋へ使いを送った。

天皇の名は中国風に、字音または訓をかりて1字に表わしたものである。この5人の王は『日本書紀』にはみえないので、九州の土酋が入貢したものとする説もあったが、いずれも大和朝廷の王とするのが普通である。すなわち武は第21代に数えられる雄略天皇、興は第20代に数えられる安康天皇、済は第19代に数えられる允恭天皇とすることは通説となっている。珍は第16代に数えられる仁徳天皇、あるいは第18代に数えられる反正天皇とする2説があり、讃は第15代、第16代、第17代に数えられる応神、仁徳、履中の諸天皇をあてる3説がある。

毎回、使者は倭の産物を献じているが、遣使の主要な目的は朝鮮半島に勃興してきた高句麗に対抗するため、倭国の地位および大和朝廷の朝鮮半島支配を中国に承認させ、それによって半島における立場を強化しようとしたものであった。倭王武は「使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王」という称号を宋から与えられた。

『宋書』の蛮夷伝にある武の478年遣使の際の上表文に、「東は毛人55国を征し、西は衆夷66国を服す。渡りては海北95国を平ぐ云々」とあって、大和朝廷の国土統一、半島遠征の状況過程を伝えている。413年に始った倭王の遣使は502年梁へのものを最後として600年の隋との再開までとだえた。

出典 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典について 情報

また、『宋書倭国伝』には 次のようにあります。（高麗の名称は朝鮮半島を表す）

宋・齊・梁に仕えた沈約（441年-513年）が齊の武帝に命ぜられて編纂した。

「夷蛮伝」（いばんでん）の中に、倭の五王から朝貢が行われたことが記されている。

（列伝第五十七 夷蛮 - 林邑国・扶南国・師子国・天竺・高句麗国・百濟国・倭国・荊雍州蛮・豫州蛮）

読み下し文（部分）

倭国は高麗の東南大海の中にあり、世々貢職を修む。高祖の永初二年、詔していわく、「倭讃万里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらわ）すべく、除授を賜うべし。」と。

太祖の元嘉二年、讃、また司馬曹達を遣わして表を奉り方物を献ず。

讃死して弟珍立つ。使いを遣わして貢献し、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東將軍・倭国王に除す。

珍、また倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国將軍の号に除正せんことを求む。詔して並びに聴す。

二十年、倭国王済、使いを遣わして奉献す。また以て安東將軍・倭国王となす。二十八年、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東將軍は故のごとく、ならびに上る所の二十三人を軍郡に除す。済死す。世子興、使を遣わして貢献す。

世祖の大明六年、詔していわく、「倭王世子興、奕世戴（すなわ）ち忠、藩を外海に作（な）し、化を稟（う）け境を寧（やす）んじ、恭しく貢職を修め、新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東將軍・倭国王とすべし。」と。

興死して弟武立ち、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍、倭国王と称す（倭王武については、常陸国風土記にも記載があります。）

順帝の昇明二年、使を遣わして上表す。いわく、

「封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰躬（みづか）ら甲冑をツラヌキ、山川を跋涉し、寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国、王道融泰にして、土を廓（ひら）き、畿を遐（はるか）にす。累葉朝宗して歳に愆（あやま）ず。臣、下愚なりといえども、忝なくも先緒を胤（つ）ぎ、統（す）ぶる所を驅率し、天極に帰崇し、道百濟を遙（へ）て、船舫を装治す。しかるに句麗無道にして、図りて見吞を欲し、辺隸を掠抄し、虔劉して已まず。

毎に稽滯を致し、以て良風を失い、路に進むというといえども、あるいは通じあるいは不（しか）らず。臣が亡考済、実に寇讐の天路を壅塞（ようそく）するを忿（いか）り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄（にわか）に父兄を喪い、垂成の功をして一簣を獲ざらしむ。居（むな）しく諒闇にあり兵甲を動かさず。これを以て、偃息して未だ捷たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士虎賁文武功を効し、白刃前に交わるともまた顧みざる所なり。もし帝徳の覆戴を以て、この疆敵を摧（くじ）き克く方難を靖んぜば、前功を替えることなけん。窃かに自ら開府儀同三司を仮し、その余は咸（み）な仮授して以て忠節を勧む。」と。

詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭王に除す。

（以上 宋書倭国伝：読み下し文）



しかし、割り当てられた『記・紀』側の各王「応神～雄略」の和風の呼び名とも漢風の諡号とも何の関係のない「讃・珍・済・興・武」という名をどのようにして「応神～雄略」に結びつけたのか、疑問に思っていました。その説明は、書かれていません。

『常陸国風土記』の倭武天皇について

『常陸国風土記』に見える倭武天皇について考えてみました。この倭武天皇を通説ではヤマトタケルとしていますが、天皇ではないヤマトタケルを倭武天皇とするのもおかしいことですが、その文字表記も『日本書紀』の「日本武尊」とも『古事記』の「倭建」とも異なり、記紀よりも僅かですが後（養老6～7年頃）に成立した『常陸国風土記』であるにもかかわらず、記紀の表記とは異なる倭武天皇としていることから、『常陸国風土記』編者は記紀以外の伝承記録に基づいたのではないかと考えられます。

そうであれば、『宋書』倭国伝に見える倭王武（倭武＝国名に基づく姓＋中国風一字名称）の伝承記録、すなわち九州王朝系記録に倭武天皇とあり、それに基づいて『常陸国風土記』で倭武天皇として記録されたのではないのでしょうか。

更に言えば、当時の九州王朝の国王は「天皇」を自称していた可能性もありそうです。この時代、九州王朝は中国南朝の冊封体制に入っていましたから、「天子」を自称していたはずはありませんが、「天皇」であれば中国南朝の天子の下位であり、問題ないと思われます。とすれば、『日本書紀』継体紀25年条に見える「日本の天皇及び太子・皇子」の百濟本紀の記事も、このことに対応していることになります。

倭武天皇の活躍と『宋書』倭国伝に記された倭王武の軍功の対応も、倭武天皇＝九州王朝倭王武説を支持すると思われる。従って、各地に残るヤマトタケル伝承をこうした視点から再検証するのを感じます。たとえば、「阿波国風土記逸文」に見える「倭建天皇命」記事や、徳島県には倭武神社も有り、慎重な検討が必要です。

●倭の五王の大和朝廷説について、一例を上げると、次のような意見があります。

倭の五王とは、413年から502年の約100年間に、中国の南朝と通交した倭（日本）の五人の王者 讃、珍、済、興、武のことで、通説では、讃＝仁徳天皇、珍＝反正天皇、済＝允恭天皇、興＝安康天皇、武＝雄略天皇とされています。（←通説・定説は、ここから始まっています。）

倭の五王に関して、日本側と中国側の記録の食い違いを理由として九州王朝の王者群とする説がありますが、この九州王朝説は誤りです。（← 断定して始まります。）

「ここで云う九州王朝説とは、次に記述する古田氏の説を指していると考えられます。」

「倭の五王」について古田氏説で、要約すると以下の内容になります。

倭の五王（讃・珍・済・興・武）について、歴代天皇に擬する諸説があるが、いずれも、年代・系図・日本列島側の説話からいって、しっくりこない（近畿天皇家ではない可能性が高い。）

倭の五王、とくに倭王武の上表文に依れば、彼等が都したのは、九州の可能性が高く。

隋書には、「日出づる処の天子」を称したのは、男王（「妻を鷄弥という」という記述あり）である。

同じ時期に、近畿には、推古天皇がいた事になります。

明確に「第一の王者」を称しており、聖徳太子（No.2：摂政）ではない。

隋書自体の地理描写により、「日出づる処の天子」がいたのは、阿蘇山の描写などがあり。九州と思われる。

旧唐書は、「倭国伝」と「日本伝」が別れている。「倭国」と「日本国」は、その領域についての記述が異なり、別国である。「日本伝」の描写は、「続日本紀」近畿地方とよく一致するが、「倭国伝」は、全く一致しない。という点などから、いわゆる「倭国」は、九州を中心とした王朝で、「日本国」は近畿を中心とした王朝である。という事になる。

この古田説の肝要の一点は、「九州王朝は、白村江の敗北によって滅亡した」ということにあります。

そして、その後の701年（大宝元年）、「日本国」が「倭国」に替わり日本列島の王者となった、というのです。つまり、「白村江」は、九州の「倭国」の王者が指揮して行ったものである、ということです。

つけくわえれば、「日本」はこの戦いには消極的だったのです。・・・以上要約。

すなわち、（倭の五王の大和朝廷説についての続き）

1. 倭（日本）による朝鮮半島への進出は、366年に百済と同盟してから663年の白村江での唐・新羅との戦いを経て668年の高句麗の滅亡までの303年間で、倭（日本）が政治・軍事・外交面で朝鮮半島に関わった年次は81回にも及び、これは4年に1回の割合で、しかもほとんど300年の間、連続的に起こっており、また倭（日本）は万余の大軍を朝鮮半島に送り続けたことが記録されている。

このような事態は、日本国内の政治的・軍事的統一を前提としない限り考えられず、この期間に活躍した倭の五王も当然のこととして大和朝廷の天皇ということになる。（推測・記録なし）

→結果：大和朝廷は、参戦していなかったからこそ畿内の大古墳を造り続けられたと考えられます。

2. 倭王・讃に有力視される仁徳天皇、およびその前の応神天皇は世界最大級の大古墳を築造している。

すなわち倭五王の時代、近畿大和朝廷はすでに強大な政治的・軍事的力を保有していたと考えなければならない。仮に倭の五王の時代に日本国内が西の九州王朝と東の近畿大和朝廷に二分されていたとすると、西の九州王朝は応神・仁徳に代表される強大な近畿大和朝廷の脅威を背後から受けながら、朝鮮半島へ大軍を送り続けたことになる。九州王朝は国内統一よりも200キロの海を渡った朝鮮半島の経営を優先させたのでしょうか。しかしそのような事態は、政治的・軍事的観点からして全く考えられない。

→結果：大和朝廷が、参戦していなかったからこそ663年の白村江での敗戦となったものと考えられます。（九州と近畿は親戚関係に有り、敵対していなかったと考えられます。）

3. 倭の五王に関する日中両国の記事については、大筋で合っているという説と、大きく食い違っているとの評価に二分されている。記録の食い違いには、誤認・誤記・誤写に基づく「単純な食い違い」と、政治的思惑による「意図的な食い違い」があり、倭の五王に関する記事でもこの二つの食い違いが混在している。倭の五王に関しては、政治的思惑による「意図的な食い違い」は深刻な問題である。

すなわち、

4. 正史『日本書紀』は中国王朝との関係については、「天皇家による大和朝廷は、中国の歴代王朝に対して決して臣従していない、対等な関係である」、「近畿大和朝廷が中国の歴代王朝に臣従していたという事実関係は認めない」、というのが基本的な立場だ。

『日本書紀』は「親魏倭王」に制せられた「卑弥呼」「邪馬台国」すら認めておらず、単に神功皇后の治世を201～269年として3世紀邪馬台国時代に合わせるにとどめている。すなわち『日本書紀』は神功紀に魏志倭人伝、晋起居注を引用しながら「邪馬台国」「卑弥呼」「台与」との表現を一切さけて、神功皇后が卑弥呼であるような無いような、あいまいにしている。（神功皇后=卑弥呼が、同時代は無理。）

神功皇后を卑弥呼の虚像と呼んだゆえんである。そして卑弥呼の実像は神代に送られ、高天原の天照大御神とされたのである。ましてや、中国王朝の臣下を自他ともに認めた「倭の五王」が大和朝廷の天皇であったことを許せるはずがない。九州王朝説者は、日中の記録の食い違いから、倭の五王を九州王朝の王者群としている。

しかし話はあべこべなのである。『日本書紀』は作成にあたり多くの漢籍を参考とし、倭の五王を記した『梁書』からも205字を借用しているが、『日本書紀』の編者（大和朝廷）にとって、中国側の記録に現れる倭の五王が大和朝廷の天皇群と「合致しては困る」「一致してはまずい」のである。

『日本書紀』の編者は、倭の五王に関する中国側記録を手元に置きながら、これとあまり一致しないように『日本書紀』を編集したのである。したがって、『日本書紀』は応神・仁徳・雄略天皇の時代に、日中の使節が往来したことをさらにと記述するにとどめた。これは、神功紀での邪馬台国・卑弥呼・台与の扱い方とまったく同じ手法である。このように、近畿大和朝廷が認めなかった、また抹殺した「影の歴史」をつなぎあわせると、いわゆる九州王朝ができあがる。まさに「幻の九州王朝」の蜃気楼である。

5. 九州王朝説の根拠の一つとして、『隋書』にあらわれる600年、607年、608年の日中交渉の記事がある。最大の論点は、この当時の倭王（日本国王）は、男帝か女帝かということだ。というのは『隋

書』によれば、この当時の倭王は「姓は安每（アマ）」、字は「多利思比孤（タリシヒコ）」とあって、「王には妻と後宮に女、六、七百人有り」と、男帝と記されているからである。

ところがこの当時の日本国王は女帝の推古天皇で、九州王朝説者はこの違いを最大の根拠として、隋王朝と交渉したのは「九州王朝の男王」と主張している。しかしこの説も誤りである。

『隋書』での安每・多利思比孤（アマ・タリシヒコ）とは、天足彦（アマタリシヒコ）で天皇の諱（いみな）には足彦（タラシヒコ）というのが多いので、一般天皇の称号とする通説が妥当である。（根拠なし）

607年と608年の日中交渉の記事は『日本書紀』にも記載されており、『隋書』と完全に一致している。また、『隋書』の607年条は「其の王・多利思比孤」、608年条も「倭王」と一般称号で記しているの

で特に問題はない。（同一の根拠なし、神功紀での邪馬台国・卑弥呼・台与の扱い方と同じ）
問題は600年条の「王には妻と後宮に女、六、七百人有り」の記事だ。しかしこの当時、聖徳太子は摂政として「ことごとく全権を委ね」られた事実上の国王（倭王）であり、「十七条の憲法」や隋の煬帝への「日

いずる国の天子、云々」の国書も聖徳太子のものとされている。したがって、聖徳太子は国内的にも国外的にも事実上の国王（倭王）と振る舞っていたわけで、このことが『隋書』の600年条に反映していると推定するのが、妥当である。（遣隋使も摂政が国王を名乗ることも確認されていません。）

『日本書紀』は、編集に際し『隋書』も参考とし、これより347字の章句を借用している。しかしながら『隋書』の600年条を見た『日本書紀』の編者は、困惑すると同時に、『隋書』での事実上の倭王（聖徳太子ー男王）と『日本書紀』での形式上の倭王（推古天皇ー女帝）との混乱を避けるため、600年の遣隋使は『日本書紀』に記載しなかったのである。

●ところが「盗まれた神話・古田武彦氏」に倭の五王の比定が、取り上げられていました。
その中では、史実と『記・紀』説話とのくいちがいは、一遠慮せずにいえば「真面目に考えられる」ことがなかったのではないかと。なぜなら、津田氏の「記紀造作」説を前提としてきたからです。しかし、意外な地点から問題は急旋回しました。

日本古代の史実を示す基準として、疑いなきものとされてきた倭の五王や高句麗好太王碑が、実は近畿天皇家とは無関係だということ、その事実が判明してきたのです。

これまで五王を「仁徳～雄略」と結びつけてきた唯一の「きめ手」は「人名比定」です。たとえば、五王の最初「讃」を例にとりますと。これには「履中」説と「仁徳」説があります。

まず、履中天皇にあてる論者は、履中の名「去来穗別（いざほわけ）」の第二音「ざ」を中国側が勝手に抜き出して「讃」と表記したとの事でした（松下見林『異称日本伝』）。これに対し、この「讃」を仁徳天皇にあてる論者は、仁徳の名「大鶴鶉（おおささぎ）」の第三・四音に当る「さ」または「ささ」を切りとって、中国側が「讃」と表記した、というのです。

これらの説の背景をなす、暗黙の前提は、日本側の長たらしい王名は、中国側の名のつけ方に合わない

ので、中国風の一字名称（たとえば、魏の曹操の名は「操」）の形に強引に直したのだ、という想定です。
上記のようなこじつけに疑問を感じた古田氏は、『宋書』全体の夷蛮（中国周辺の国々）の王名を調査しました。すると、四字・七字といった長たらしい名前の王名が続々見つかり、「一音勝手切り取り表記」など、『宋書』中、例がないといひます。

阿柴虜あしりよ（遼東鮮卑）とか舍利不陵伽跋摩しやりふりようがばつま、といった風に 4 字・7 字といった長たらしい名前の王名が続々見つかったのです。だから、もし「イザホワケ」なら、たとえば「夷坐補和卦」といった風な、五字表記をするはずであって、「一音勝手切り取り表記」など、『宋書』中、例がありません。そういうことがハッキリしました。

つまり、従来「仁徳～雄略」を五王と結びつける論証とされてきた唯一の鍵が、実は鉄の鍵ではなかった。ということになりました。

一切の先入観を排して判断すれば、従来の「定説」は誤りである。と考えなければなりません。

それでは「倭の五王」はどここの王なのでしょう。

そればかりではなく。倭王武の上表文にあらわれている有名な文句、
「東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国。」
は、中国の都（南朝劉宋の建康〔今の南京〕）を原点とした表記であり、近畿を原点としては理解しえないことがわかってきました。

なぜなら、倭王武は自分のことを二回も「臣」と書いています。中国の天子を中心にした大義名分のもとに、この文面は作られています。だから、「衆夷」とは、自分たち（東夷）をふくむ 周辺の倭人（九州）を指す表現であり、「毛人」はさらにその東（瀬戸内海西半分〔強〕）であることになります。

近畿を原点とした従来の読み方では、倭王が自分を「天子」の位置におき、西を「夷」と称し、すぐ東を「毛人」と称したこととなります。「東夷の国々」の一つとして記された倭国の記事として、これは「めっちゃくちゃ、としかいいようがありません。このまま中国側が正規の史書に記録することは、ありえないと思われます。また、朝鮮半島南半部を指す「海北」という表現も、九州を原点とした場合において、もっともスッキリ合致することはいうまでもありません。

つまり「倭の五王」は九州王権の大王たちだったのです。（了）

解説：古田 武彦（ふるた たけひこ、1926 年（大正 15 年）8 月 8 日 - 2015 年（平成 27 年）10 月 14 日 [1]）は、日本の思想史学者・古代史研究家。元昭和薬科大学教授。専門は親鸞等の中世思想史だが、むしろ古代史研究において著名である。出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

解説：津田 左右吉（つだ そうきち、1873 年（明治 6 年）10 月 3 日 - 1961 年（昭和 36 年）12 月 4 日）は、20 世紀前半の歴史学者である。『日本書紀』『古事記』を史料批判の観点から研究[注 1]したことで知られる。栄典は従三位勲一等瑞宝章、文化勲章。

注 1：津田はよく記紀を「否定」したともされるが、津田自身は、それを誤解であるとしていた。また、津田自身は天皇制を「否定」したことはない。新川登亀男・早川万年編『史料としての『日本書紀』 津田左右吉を読みなおす』勉誠出版、2011 年。出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

解説：盗まれた神話（記・紀の秘密） 1994 年 1 月 1 日発行・・・『古事記』『日本書紀』のなかの主要なもの、ことに神話を中心にこれまでの議論の矛盾や無視されてきた疑問点を洗い出し、九州を主舞台とした最古王朝の存在を明らかにする。